

日本建築史講話

關野貞述

日本建築史の開拓者として關野貞先生の名は、伊東忠太先生と相並んで、燦として輝く。本書は關野博士が武藏高等學校の生徒のために五回(十時間)に亘りて講義された時の筆記を基とし、それを博士の手控によつて整理したもので、博士の校閲を経ない内に博士が易筆せられたから、同校教授原田亨一氏や足立康博士、大岡實氏等の助力によつて原稿を完備出版されたものである。

日本建築史に關する書物は相當上梓されたものがあるけれども、どうしても大部のものとなり、従つて専門的なものと成り勝ちであるために、初心者には難解であり、難讀である。さうした専門的な著書の存在もとより喜ぶべきものであるけれども、建築史を知りたいと念じつゝある人々のためにも容易に讀み得る建築史、それこそ現代學界の最も要求して居るものではないか。高等學校生徒程度の専門學書。それが最も必要な書物ではなからうか。其の觀點から言ふならば、本書は、其の要求に全く合致したものであり、本書印行を企てた人々も亦其の要望を耳にせられたのであらう。原始時代、飛鳥時代、寧樂時代、平安前期、平安後期、鎌倉時代、室町時代、桃山時代、江戸時代、明治時代の各時代に區分して、それ〴〵佛寺、神社、住宅の建築を説き、古代に於いては墳墓に、室町時代以後には

茶室に、桃山江戸には城郭と靈廟に、言ひ觸れ、一通りの古建築史を理解する事には、頗る役立つ。加ふるに附載として、「日本建築重要遺構一覽」「建築用語解説並附圖」「建築用語索引」の三種が冊尾に添へてある事は、どこまでも初心者に親切な用意と言へよう。

關野先生のかうした一貫した建築史と言ふものは、外には一冊も纏つて居ないのであるから、其點で、先生の建築史に關する大系を窺知するためには唯一のものであり、それだけでも本書出版の價値は大きい。但し、披讀して行つて、何となしに型が古い、と言ふ感のする事は否まれない。従つて、讀む者に對する迫力が弱い様にも思はれる。

それにしても、かうした講義を生徒に必聽せしめ、其の方面から少とも「日本」といふもの、正しい認識を培はんとされつゝある山本良吉先生の苦心には、多大の敬意を表する。(岩波書店發行、四六版二五八頁、定價一・二〇)(中村)

○建國神話論考

三品彰英著

「古代朝鮮に於ける王者出現の神話と儀禮」「古代朝鮮の政教と穀靈信仰に就いて」等の雄編によつて本誌の讀者にも夙にその名を知られてある三品彰英君は、今春外遊の途につくに先立つてその論考を輯めて一書とし、われら内國にあるものへの置土産とせられた。題して「建國神話論考」といひ、古代祭政と樹

林、布都之御魂考、久麻那利考、神代より人代へ、の四編を収録してゐる。君が十指に餘る既往の述作中より特にこの四編のみ選んだことは、自ら以て最も自信ありとするものか、否か、筆者に於てもとより知るべくもないが、少くとも君の神話に對する犀利なる着眼と日鮮支三國の文獻に亘る豊富なる學殖と、加ふるにその論を進むるに際しての自由にして攪まざる思考力とは、これらの四編に於て遺るところなく示されてゐるやうである。今、簡単に各編の梗概を記すならば――

まづ巻頭の一編に於ては古朝鮮に於て王京を意味する徐伐(Seul)なる語は同時にまた樹林をも意味することに着目して、廣く古代祭政が樹林の中に於て營まれたことを明にして、その神聖なる樹林に降臨する神の子を迎へる儀式がやがて建國の歴史として語られる神話の内容を形作るものであることを暗示し、第二編に於てはその神靈の降臨が高句麗の朱蒙神話、わが三輪山傳説、賀茂傳説を始め、神武天皇やササノヲノ尊、タケミカツチ、天日杼等の物語に於て等しく光若しくは劍の形に於て物語られてゐることの意味をそれらのいづれにも共通して存するフツ・フルなる名辭を便に考へて、それが刀劍及びそれに伴ふ祭儀と共に朝鮮より我國に傳つたものなることを推斷した。第三編は建國神話に於ける「水の熊神」の研究なる副題を有ち、かのギリシヤ神話のアルテミスに於て最も多く人々に知られてゐる熊の形をとる水邊の母神といふ特殊な神話の要素を、支那に於ける禹の治水傳説、高句麗に於ける朱蒙傳説、及びわが熊野

浦の神々の物語に通じて認め、それらが種々の要素の複合にもかゝらず要するに一つの神婚、或は神婚による神の子の生誕によつて建國の起源を語るものであることを明にしてゐる。而して最後の二編はかくの如き建國の神話を記紀の編者が歴史として記述するに當つてそこに如何なる變形が加へられたかを、神武天皇東征の物語に就いて考へ、神代より人代への發展は實は神話を語る心より歴史を記す心への發展に基因するものなることを明確に示して、以て全編に對して結論的な完結を與へてゐる。

思ふに從來神話を論ずるものは多く神話をそれを傳へた民族の歴史からきりはなして唯その筋若しくはその中心神格の性格のみの同異を以て相互に之を比較類別し簡単に一より他への傳播波及を説いたのであるが、この書にあつては神話は常にその背後にある儀禮や習俗との關聯に於てその意味が考へられ、且つ他民族の神話との比較は常に他の一般文化に於ても相互に共通するものを有する民族の間、即ち所謂同一文化圏内に於て試みられ、その間の傳播を考へるに於ても一個の固定した神話がそのまゝの形で傳へられるのではなくして流傳の間に種々の要素が複合し同一の根源から幾通りもの異傳の生ずることを見ようとしてゐる。それこそ神話の民族心理學的な研究や、比較言語學的な研究に對して正しく歴史的的研究と呼ぶべきものであり、この書は縦ひ個々の神話の解釋に於て直に萬人の同意を得られないことがあるとしても、その方法に於ては確に一つの新

しい生面を神話研究の上に開いたものといへよう。(菊判二九八頁、東京目黒書店發行、定價三・〇〇)(柴田)

○岡本道可傳

岡本 勇著

岡本道可は江州甲賀の七黨伴氏の出、天正十一年尾張の星崎に生れ、十一歳の時より一本の槍を頼りに所謂渡り奉公人として轉々主を換ふること九人、最後に伊勢の藤堂和泉寺に仕へて大坂陣に武功をあらはし、數次加増をうけて知行千石、鐵砲頭の地位にまで上つたが、然も偶々その意に協はぬことがあれば直に主家を立退いてもとの浪人の身となり、優詔を以て再三召返へざるゝに及んで遂に藤堂家の家臣として生を畢へた。その名は必ずしも偉大を以て稱するに當らないであらうが、その七十歳の生涯は「歩行足輕の時より一國一郡をも望む事侍の本意」なりとした戰國武士の一典型としてまた傳ふるに足るものがある。本書の記者は道可直系の後裔とのことであるがその祖先の行履を述べるに當つて濫に子孫としての私情を挾まず、一々家藏の文書資料を引用し、たゞ道可その人一人のみならず、廣くその周圍の關係者の事蹟を稽へて、淡々たる筆致の中によく當時の侍の身の浮沈や、その意地やかたきを敘してゐる。蓋し、廣く時代の心を顧み、武士道發展の跡を論せんとする人の一讀興味すべきところであらう。(菊判和裝一九八頁、非賣)(柴田)

○後醍醐天皇宸翰集

國民精神文化研究所編

國民精神文化研究所は、かねて皇室御撰集の謄寫を計畫してゐたが、その第一として後醍醐天皇宸翰集が公刊せられた。

「天皇の宸翰に對しまつれば、國民は 天皇の御安業のうちに履ませ給ひし御艱難の道を偲び奉るとともに、また御修練のいや堅く坐せしを目のあたりに拜しまつるのであつて、中興政治の御聖謨のいよく高く尊きを仰ぎ奉るのである。本集を讀みて刊行する意義も亦實にこゝに存するのである。」と、本集の序文に見ゆる如き趣旨のもとに、同研究所々員西田直二郎博士の監修、囑託赤松俊秀氏の編纂及び解説に依つて成つたのである。

收むる所十五點、天皇の御眞蹟として確かなる徵證のあるものゝみを精選し奉つてゐる。即ち、東山御文庫御藏の御消息(帝室御物)、堀部功太郎氏藏の慈道法親王御消息並天皇御返狀、鹿王院藏の御消息並後宇多天皇宸翰御返狀(國寶)、岩崎男爵藏の御消息、教王護國寺藏の東寺正中元年御置文(國寶)、鴻池男爵藏の和歌懷紙、仁和寺藏の御消息、鰐淵寺藏の御願文(國寶)、出雲大社藏の寶劍代繪旨(國寶)、大德寺藏の大德寺御置文(國寶)、教王護國寺藏の東寺元弘三年御置文(國寶)、金剛峯寺藏の御願文(國寶)、前田侯爵藏の御感狀、三寶院藏の天長印信(國寶)、根津嘉一郎氏藏の愛染明王像勅贊などである。